

令和 2 年度 文部科学省委託事業

「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

## 幼稚園における学校評価に関する調査研究

～遊びを通じた学びの充実を目指して～

令和3年3月

福島県教育委員会

本報告書は、文部科学省の「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究（幼稚園における学校評価に関する調査研究）」の委託費による委託業務として、福島県教育委員会が実施した令和2年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

# 目 次

---

<b>I はじめに</b>	<b>2</b>
1 幼稚園における学校評価に関する調査研究事業	
2 本県の現状と課題	
3 本県における課題と学校評価に関する調査研究	
<b>II 幼稚園における学校評価の取組について</b>	<b>4</b>
1 各地区の現状～研修会より～	
2 調査研究の目的と内容	
<b>III 調査研究の体制について</b>	<b>5</b>
1 協力園について	
2 調査研究実行委員について	
3 調査研究実行委員会の開催について	
<b>IV 協力園の取組について</b>	<b>6</b>
1 調査研究年間計画	
2 協力園の悩みや課題について	
3 協力園の重点目標と取組案	
4 評価指標作成における共通事項について	
5 遊びの充実を目指した取組と変容について	
6 学校関係者評価への取組について	
7 今後の課題	
<b>V 調査研究から見えた学校評価に取り組む際の留意点</b>	<b>15</b>
<b>VI おわりに</b>	<b>17</b>

# 幼稚園等における学校評価に関する調査研究

## I はじめに

### 1 幼稚園における学校評価に関する調査研究事業

幼児教育の無償化など社会の変化が進む一方で、平成30年度から実施となった幼稚園教育要領等を踏まえた教育改善と幼児教育の質の向上が求められている。

このような状況を踏まえ、文部科学省では、幼稚園における指導の在り方等に関する調査研究の委託事業を実施しており、本県では、本事業の委託を受け、学校評価により各園の教育活動や園運営の改善を図っていく方法について検証することとした。

### 2 本県の現状と課題

本県における今年度の幼稚園数は233園、幼保連携型認定こども園数は95園であった。平成28年度と同調査では、幼稚園数は293園、幼保連携型認定こども園数は55園であり、5年間で大きく変化があったことがわかる（資料1）。

	国公立幼稚園	私立幼稚園	公立幼保連携型 認定こども園	私立幼保連携型 認定こども園	合計
平成28年度	167園	126園	21園	34園	348園
令和2年度	129園	104園	30園	65園	328園
増減	-38園	-22園	+9園	+31園	-20園

【資料1 福島県における幼稚園・幼保連携型認定こども園の数】

これは幼稚園が認定こども園へ移行したことによる変化もあるが、一方で少子化が進んだことによる統廃合、幼稚園等再編の結果でもある。

本県は、平成23年3月の東日本大震災及びそれに伴う原子力発電所の事故の影響により長期間にわたる避難生活が続くこととなり、少子化の波が急激に押し寄せた。また、震災後は、園での遊びにおいても、外での活動や自然物を使った遊びに制限を強いられた時期があり、教育活動における様々な環境の変化が生じた。しかし、これまで当たり前に行われてきた教育活動ができなくなるという状況においても、「代わりにできることはないか」、「今すべきことは何か」、と工夫しながら進めてきた。震災から数年が経つと、「少しずつ震災前の教育活動に戻していこう」、「そろそろ環境の見直しを図る必要がある」、「通常の教育ができる環境になってもやっていないことが多いのではないか」、という意識の変化が見られるようになってきた。制限の中で取り組んだ教育活動の成果と課題について、幼児の発達の変化や影響にも目を向けながら、改善に向け試行錯誤が始まろうとしていた。

だが、その途中で長年幼児教育に関わり、園をリードし指導してきた教師が次々と定年を迎えた。市町村によっては採用がなかった時期もあったため、教師の若年齢化は一気に進み、その結果、新たな課題が増えることとなった。これまで、各園における幼児教育の展開は、それぞれの教師の知識経験を生かしながら、園生活における様々な場面の中で、教育活動や実情に応じて工夫し、見直され、改善しながら継承されてきた。

しかし、継承が進まない状況でも定年退職と大量採用による急激な若年齢化は進み、その結果、震災前の遊びの様子を知らない教師、震災による制限の中で代替として行った取組が今ではそれが通常の実践となっている教師も少なくない。

また、公立幼稚園においては、各世代の教師が経験年数に応じてバランスよく採用・配置されているわけではなく、職員数も少ないので、採用数年で園をリードする立場になることもあった。そのため、園内研修の進め方や教育内容の見直しや改善に苦勞している教師も年々増えている。

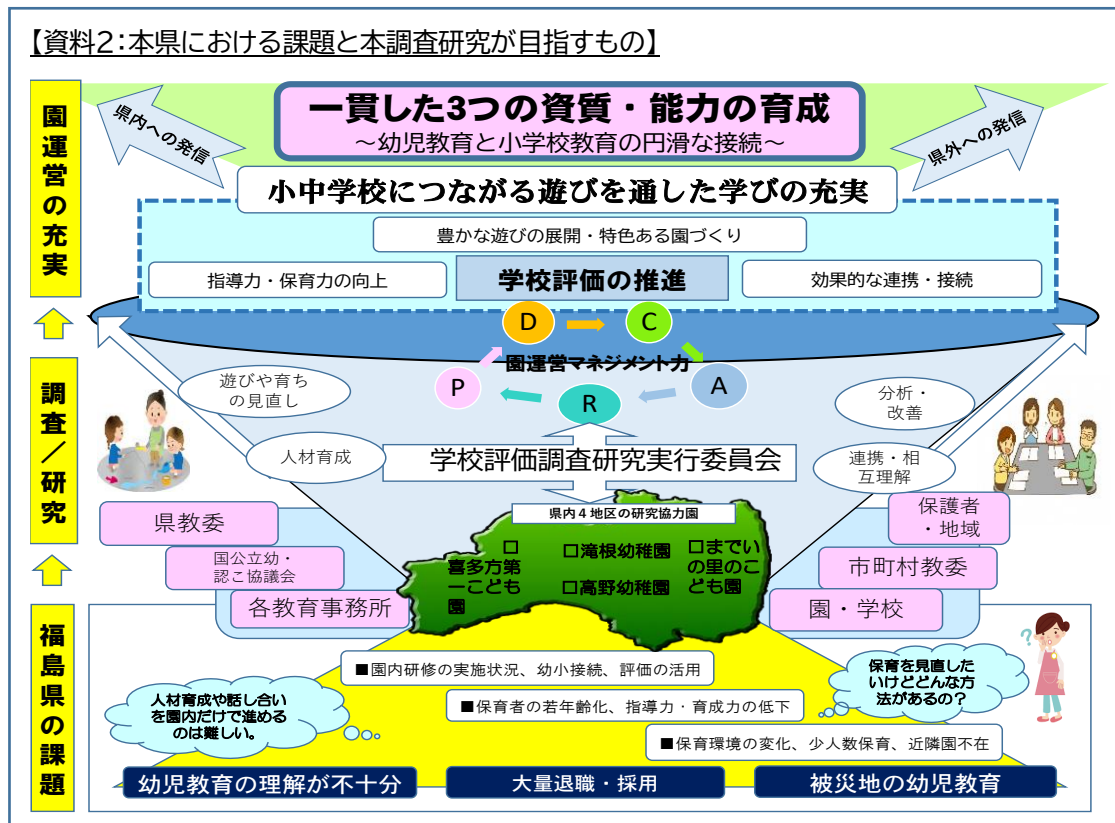
幼児教育においても様々な悩みや課題が山積している状況である。

### 3 本県における課題と学校評価に関する調査研究

改訂された学習指導要領及び幼稚園教育要領では、その基本理念において、一人一人の確かな学びについて、「どのように学ぶか」ということの本質として「主体的・対話的で深い学び」の過程で重視していることが示されている。幼児期においては、それが遊びの中での学びの過程で実現できているかを見直し、質の高い学びを目指すことが必要とされている。

幼児教育は、環境を通して行う教育が基本となり、自発的な活動としての遊びを心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な「学習」として位置付けている。幼児の発達の特性から、幼児が興味関心をもち自ら環境に関わる中で、試行錯誤を繰り返しながら、感じたり、気付いたり、考えたりし、それを新たな出来事や問題に生かしていく過程が、幼児期の学びとしての意味を持つからだ。幼児期における資質・能力を育む上でも遊びを通した学びの充実が欠かせないものであるが、本県は課題となる部分でもある。

資料2は、本県における課題と本調査研究が目指すものをまとめたものである。



そこで、学校評価を通して、遊びについて見直しや改善を図ることで、幼児期における一人一人の遊びを通じた学びを充実させていくことを目指した。そのための環境や援助も含めた教育について、園の実情を踏まえた上で、課題解決につながる実効性ある学校評価の在り方について、実践を通して探ることとした。

## Ⅱ 幼稚園における学校評価の取組について

### 1 各地区の現状～研修会より～

学校評価の取組は、多種多様であり、方法や内容は地区や園によるため、実際の取組状況や課題を捉えられずにいた。今年度、本調査研究とは別に、各支部や地区での学校評価をテーマにした研修が行われた際、園の取組状況が紹介されたことで見えた実状や、学校評価を組織的・計画的に行う上での相談には、次のようなものがあった。

- ・園には決まった評価指標があり、毎年同じ内容について評価している。
- ・評価指標とは何か。
- ・自己評価やアンケートの集計が大変。分析や対策までは行っていない。
- ・学校関係者評価の理解が不十分である。

上記以外にも、実施方法や内容にも課題があった。園の重点目標に対して具体的な対策の検討や取組よりも、評価した結果を数値化すること、結果をまとめることが学校評価となっている園もあった。自己評価はしているが、その結果が次年度につながっておらず、本来の目的や機能が果たされていない状況もわかった。

### 2 調査研究の目的と内容

本県の幼児教育には、遊びを通じた学びの充実に関することと、学校評価への取組に関することの2つの課題がある。この2つの課題を効果的につなげるため、学校評価をツールとして、遊びを充実させるための取組を評価したものを実践事例として普及することで、幼児教育の質の向上を図るための調査研究を行った。

本調査研究では、園の教育目標や、前年度の課題を基にした重点目標、その確認のための評価項目や評価指標を設定し、評価し課題を明らかにし、それに向けた具体的改善策を立案・実施し、次の具体的改善に生かしていく実効性ある学校評価の実施を目指し、今年度はその第一歩目として、「園運営や幼児教育の質的改善を目指した園における学校評価の在り方—社会に開かれた学校評価を通して子供を育むために—」をテーマに、重点目標に向けた取組について、具体的に評価するための評価指標を作成しPDCAサイクルを効果的に機能させながら、園運営や教育活動の改善を図っていく。また、実行委員会や園内研修等での協議内容も生かしながら、学校評価を推進することとした。

## Ⅲ 調査研究の体制について

学校評価の実施において、課題を基にした重点目標や評価指標の設定、課題改善の方法、具体的な取組については、様々な方法が考えられる。

そこで、今年度は、県の課題である「幼児期における遊びを通じた学びの充実」に対す

る改善策の検証も加えた実践検証を行うために、県内の地域や園種、規模等が異なる4つの幼稚園・認定こども園を協力園として指定した。それぞれの園の課題をふまえて実践を通して調査研究を行うこととした。

## 1 協力園について

学校評価を実践的に行い、改善を繰り返す園を「協力園」として位置付けた。

協力園においては、実行委員会での協議内容や園での園内研修をもとに、園における学校評価を推進し、学校評価に到達するまでの歩みや評価方法の工夫、重点目標にせまるための評価が機能するPDCAサイクルの在り方等について実践を通して検証するとともに、協力園における調査研究の計画については、各園において定めることとした。

## 2 調査研究実行委員について

協力園の取組を支援したり方向付けたりする組織として実行委員会を設けた。

実行委員は、有識者として福島大学人間発達文化学類の白石昌子教授を代表、同じく原野明子教授を代表補佐とし、福島県国公立幼稚園・こども園協議会より1名、各協力園の園長4名、協力園を所管する各市町村教育委員会の指導主事4名、関係教育事務所指導主事4名による計15名で組織した。

実行委員会の任期は、調査研究実施期間である令和3年3月31日までとし、実行委員は、調査研究の内容や推進、普及等について協議及び調整を行うものとした。

## 3 調査研究実行委員会の開催について

調査研究実行委員会は、年3回の会合を開き、園における学校評価の在り方の他、調査研究に係る内容等について協議及び調整を行った。また、協議内容や協力園から出された悩みや課題等については、協議後に、本実行委員会の代表である白石昌子教授、代表補佐である原野明子教授より指導助言をいただき、調査研究の取組に生かしてきた。

第1回実行委員会：令和2年6月24日（水）福島テルサ 13:30～

### ①調査研究についての確認

- ・実行委員会の設置について
- ・調査研究の趣旨及び体制、調査研究計画について
- ・調査研究と学校評価について
- ・本県の課題と共通指標について

### ②各園・市町村の現状について

### ③「学校評価と教育の質の保証について」白石昌子教授より

第2回実行委員会：令和2年9月16日（水）杉妻会館 14:00～

- ①協力園における進捗状況の確認
  - ・遊びを通した学びを充実させるための取組、その他の取組
- ②各園の現状に対する助言 津田 和枝園長より
- ③共通評価指標の視点の例
- ④「遊びについての捉えと確認の方法」原野明子教授より
- ⑤「何のための学校評価か～実効性ある評価と遊び～」白石昌子教授より

第3回実行委員会：令和3年2月19日（金）杉妻会館 14:00～

- ①調査研究の成果と課題の報告
  - ・助言 津田 和枝園長より
  - ・まとめ 原野明子教授より
- ②取組を振り返って
  - ・白石昌子教授より

上記以外にも、10月には、協力園を対象に合同の勉強会を開催した。

勉強会では、学校評価についての基本事項の確認と共に、重点目標の設定や評価指標の作成など、調査研究に関わる内容の確認及び各園の実践事項や取り組む中での課題等について情報交換を行った。

#### IV 協力園の取組について

本調査研究は、園目標の具現に向けた園運営と幼児教育の質の向上を図るための学校評価の効果的な在り方について、実証検証を通した調査研究である。

協力園は、教育目標や前年度における課題を基に、重点目標や改善のための取組内容、その確認のための評価項目や評価指標を設定し、評価し課題を明らかにし、それに向けた具体的改善策を立案・実施し、次の具体的改善に有効に生かしていく実効性ある学校評価の実施を目指し実施した。

##### 1 調査研究年間計画

本調査研究は、資料3の内容で計画された。


協力園が行う調査研究を支える組織として、調査研究実行委員会がある。年3回の実行委員会の開催とともに、実行委員による指導助言や訪問支援体制を整えた。

また、県教育庁義務教育課指導主事による園訪問を実施し、共通指標の容を中心に遊びを通した学びの充実につながる園内研修支援を行うこととした。



【資料3 調査研究年間計画】

※必要に応じて取り組む事項

協力園における取組	実行委員会 など
<div data-bbox="280 416 820 459" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">7月～各園での実践</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>重点目標の設定</u></li> <li>・ <u>取組内容の検討と実践</u></li> <li>・ <u>評価指標の作成</u></li> </ul> <p>※学校関係者評価委員会            ※事前評価            ※状況の確認と改善            ※保護者アンケートの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>12月 自己評価の実施</u></li> </ul> <p>※学校関係者評価の実施</p> <div data-bbox="280 949 820 992" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1月まとめ（実践資料の作成）</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>次年度に向けての準備</u></li> </ul>	<div data-bbox="847 327 1362 369" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">6月第1回実行委員会</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 研究内容、方向性の確認</li> </ul> <div data-bbox="847 443 1362 562" style="border: 2px solid blue; padding: 5px;">           ※実行委員会における指導助言            ※協力園の訪問・指導助言         </div> <div data-bbox="847 636 1362 678" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">9月第2回実行委員会</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 進捗状況の確認</li> </ul> <div data-bbox="847 725 1362 768" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">10月勉強会の開催</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 指標の確認、情報交換</li> </ul> <div data-bbox="847 994 1362 1037" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">2月第3回実行委員会</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 取組についての報告会</li> </ul> 

2 協力園の悩みや課題について

協力園は、これまでの教育活動を振り返り、課題解決のための重点目標を立て、その達成に向け、教育活動を見直し、どのように改善を図っていくかを検討した。自園の課題をもとに、計画を立て、実践し、評価し、改善を次の計画に効果的につなげていくことで、教育活動の充実と保育の質の向上を進めていくことを目指した。調査研究を進めるに当たり、前年度における協力園の悩みや課題は以下のような内容であった。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 幼児は遊んではいる。だが、遊びこめているのだろうか。</li> <li><input type="checkbox"/> 発達段階に応じた遊びが展開されているのだろうか。</li> <li><input type="checkbox"/> 教師の援助や環境構成の影響を教師自身が捉えていくにはどうすればいいのか。</li> <li><input type="checkbox"/> 記録はしているが、遊びの様子やつながりが具体的に捉えられていない。</li> <li><input type="checkbox"/> 教育を充実させるためには、現行の指導計画や指導案の改善が必要。</li> <li><input type="checkbox"/> 日々の遊びを次の遊びにつなげながら、発達を促すにはどうすればいいのか。</li> <li><input type="checkbox"/> 遊びの充実につながる教師間の連携や協力の在り方を工夫したい。</li> <li><input type="checkbox"/> 経験や立場の違いがある。遊びの見取りを共有し生かしていない。</li> <li><input type="checkbox"/> 保護者や地域の方々、小学校ともっと効果的に連携したい。どんな工夫が必要なのだろうか。</li> </ul> |
|--|

### 3 協力園の重点目標と取組案

協力園は、自園の課題をもとに、重点目標を設定し、手立てを考えた。

A園は、自園の幼児の遊びの様子に対し教師主導となりがちな援助の状況に課題を感じていた。それは遊びの見取りや記録にもつながっていると捉えた。また、保護者や隣接の小学校からの要望から、幼児に関わる周囲の大人にはもっと幼児期の特性や遊びの中にある育ちや学びを理解してもらふ必要があると考え、重点目標として、**①教師の関わり方を改善する。 ②記録や指導を見直す。 ③発信を工夫する。**の3つを設定した。

B園は、小学校の校舎内に幼稚園がある。そのため、園庭（校庭）は共通スペースとなるが、使用の際、小学校と確認したり調整したりするのではなく、小学校優先という認識となり幼稚園は使用を控えがちであった。その結果、幼児は、保育室をはじめ室内での遊びが中心となっていた。そこで、**①遊ぶ時間の確保と内外環境の見直し、②教職員の意識、③保護者や地域の方へ情報発信、**という重点目標を設定した。

C園は、認定こども園への移行に伴い教職員が増え、様々な立場や勤務形態が混在することとなった。また、隣接する小学校との交流や保護者との共通理解にも課題を感じていた。そこで、自園の教育を充実させ、効果的な連携を進めるために、**遊びの見取りと可視化に目を向け、園内外で共有するための工夫**について、2つの重点目標を設定し取り組むこととした。

D園は、東日本大震災による原発事故の影響を受け全村避難となり、避難先での生活が続いていたが、平成30年度、帰村と共に幼稚園と保育所を認定こども園に移行させ、新たな環境での幼児教育をスタートさせた。2年目となった昨年度は、保育実践に目を向け取り組んだが、そこで見えた遊びに関する課題と共に、学校評価の取組を見直すことにも着手することとした。**遊びを充実させながら園児の育ちを支えていく**ために、遊びの様子についての園内研修を毎月行った。

このように前年度までの課題や園の現状に目を向け重点目標を設定した。

幼児期は遊びを通して学び育つ時期であり、遊びは幼児にとって重要な意味を持つものである。幼児教育は、環境を通して行うことを基本としており、幼児の発達の特性から、幼児が興味関心をもち、環境に自ら関わる中で、幼児にとっての遊びの中にある学びを教師が丁寧に見取り、つなげていくことを心がけることが大事である。

しかし、その捉え方や理解状況については、幼児教育に関わる教師に限らず保護者や地域、小学校の教員等によって異なる場合が多い。本県における課題と協力園における悩みを基に、協力園が自園の課題と連動させて検証することで、その成果を県内各園の取組に広げていくこと、また、協力園同士の取組を効果的につなげていくことにより、取組が深まり、本調査研究が本県の幼児教育の推進につながっていく効果的な取組となることを目指すこととした。そこで協力園では、重点目標に向かい、以下のような取組を検討し質の向上を目指した。

**【時間の確保】⇒発達段階や興味関心に応じた遊びを充実させる。**

- ・そのために、日課表を見直し、遊びを楽しむことができる時間を確保する。

【環境構成・援助】⇒環境構成、関わり方などを改善する。

- ・そのために、環境構成の状況を捉え、見直していく。

【記録・指導計画】⇒遊びを通した学びや育ちの様子を見取っていく。

- ・そのために、記録への記載内容や生かし方を工夫する。
- ・そのために、指導案の内容を見直す。

【園内研修/共有】⇒遊びの見取りを次の活動や育ちにつなげていく。

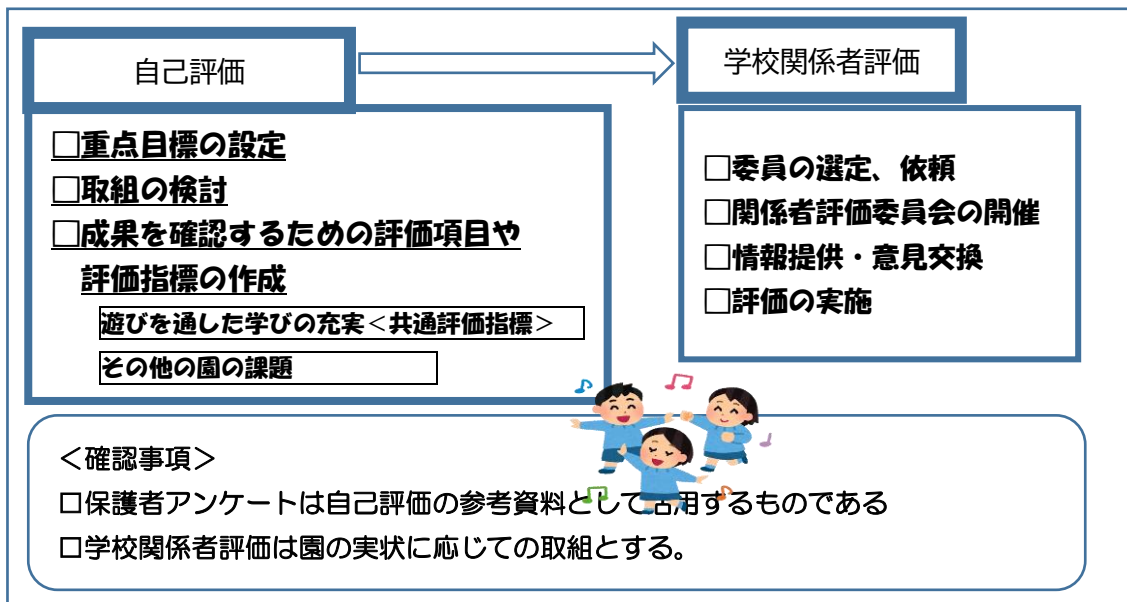
- ・そのために、園内研修の在り方や内容を工夫し共有していく。
- ・そのために、ミーティングやクラス会議など、目的に応じた共有の場を作る。
- ・そのために、降園後、遊びの様子や計画を話し合う機会を作る。
- ・そのために、遊びの見取りや記録を共有する。

【連携・発信】⇒保護者や地域の方々と幼児の育ちを共有する。

- ・そのために、意見交流の機会を設ける。
- ・そのために、取組の意図や育ちが伝わるような発信にする。
- ・そのために、コロナ禍における保育の状況を保護者に伝え共有する。
- ・そのために、発信の方法や内容を改善する。

遊びの充実に対する課題は協力園共通の課題であり、幼児期における遊びを通した学びを豊かに積み上げていくことは全体的な課題でもあることから、遊びを通した学びの充実を共通課題とし、遊びが充実しているかを捉えるために共通指標を示した。協力園においては、この内容についても確認することとした。なお、学校関係者評価については、園の実情に応じた取組とした。(資料4)

#### 【資料4 協力園における本調査研究への取組】



#### 4 評価指標作成における共通事項について

幼児期における豊かな遊びの展開や幼児教育の理解推進について、以下に示す共通の評価指標を作成した。協力園においては、今年度の評価項目や評価指標を設定する際に、この内容についても取り入れ、その改善に向けた取組について評価することとした。

◇共通評価指標◇

【教育課程】

- ①主体的な活動としての遊びを展開する時間の確保
- ②個々の思いを実現するための環境構成      ③幼児の思いに寄り添った関わり
- ④記録や評価の実施      ⑤記録や評価を生かした指導計画の改善

【研修】

- ⑥記録や教育活動を共有するための時間の確保

【情報提供】

- ⑦園の取組を理解してもらうための保護者等への発信の工夫

遊びには、発達に必要な学びがたくさん隠れているが、評価という言葉のイメージから捉え方を間違えてしまうと、幼児が何かを表現すること、できるようになることなど、見える部分のみに目を向けた取組や判断となりがちである。

また、教師の援助や環境の構成等においても、その効果がいつ現れるのか、どのような姿や部分で判断するのかが決まっていなため捉えにくく、捉え方を間違えてしまうと評価結果も大きく変わってしまう。その内容を評価すること自体が難しいものでもあるので、今年度の重点目標に対して、その取組状況をどんな視点で確認し、改善していくのかを判断する際の参考資料として、視点の例を示した。(資料5)

【資料5 共通評価指標の視点の例】

【学校評価事業 参考資料】 共通評価指標の視点の例	
遊びが充実しているのかどうかを確認する方法は決められているものではありませんが、調査研究の共通評価指標として示したものを評価する際、遊びを充実させるために大切と言われているものから共通評価指標の視点の例として活用できそうなものをピックアップしました。	
自由遊びを展開する時間を十分に確保している。	
1	1 日保育の中で、幼児が個々の興味・関心に応じて、自由に遊べるまとまった時間がある。
2	自由遊びの時間として、途切れない2時間程度の時間が保障されている。(片付けを含む)
3	全員で行う活動は、幼児の発達や興味と結びつけて選ばれており、遊びの中にも登場する。
4	幼児の年齢や実態、当日の遊びの盛り上がりなどに応じて、片づけの時間を裁量している。
個々の思いを実現するための環境を構成している。	
5	幼児が活動する場所は、自由に遊ぶことができ、安全が保たれている。
6	年齢や時期、季節に応じてものの配置や構成を工夫し、変化させている。
7	遊びの内容や様子に応じて使用するものの素材や種類、数などを工夫している。
8	幼児の興味・関心を見取りながら、遊びを提案したり、場の設定を工夫したりしている。
9	幼児が自由遊びの際に作ったものは、遊びの内容や展開に応じて、残しておくなどの考慮をしている。
10	それぞれが好きな遊びをするために十分なスペースがある。
11	虫や生き物、草花が生息する場所が園庭にあり、それらを使って遊べる環境になっている。
12	幼児の遊びに応じて、絵本や図鑑を用意し、幼児が自由に見ることができる。
13	壁面や掲示物は、現在の遊びや興味と関連を持つ内容であったり遊びのきっかけ作りになったりしている。
14	遊びに必要なものを幼児が作ることができる素材が多様用意され、自由に使えて作れる環境になっている。
15	自由遊びの中で、体を動かして遊べる環境になっている。
16	自由遊びの中で、歌やダンス、造形など、個々の表現活動を行える環境が用意されている。
17	ごっこ遊びを楽しむことができる衣装や道具、積み木などの遊具の量や種類が十分に用意されている。
18	幼児の遊びの様子から、次の日の遊びを予想したり環境を再構成したりしている。
遊びの状況に応じて幼児の思いに寄り添った関わりをしている。	
19	保育者も子どもたちと一緒に遊び、その楽しさを味わっている。
20	見取ったことを基に、予想したり子どもと相談したりして必要な材料や道具を用意している。
21	発達段階に応じた関わりや配慮や工夫を保育者間で共有し、それを理解して保育している。
22	遊んでいる幼児の気持ちを読み取って必要な援助をしている。
23	幼児の言葉や行動に対し肯定的に応答している。
24	幼児同士で言葉のやり取りができるような関わりを心掛けている。
指導の過程についての記録や評価を行っている。	
25	遊びの様子や保育者の関わりと共に、幼児の内面を読み取ったことを記録として残している。
26	ものとの関わりや他の遊びとのつながり、環境との関わりなどを捉えた記述がされている。
27	記録により、幼児理解を深めると共に自身や自園の保育を見直している。
記録や評価を生かし、指導計画の改善を図っている。	
28	子どもの育ちを園内で確認したり相談したりしながら共有し、園全体で保育の確認や検討をしている。
29	行事の検討・実施においては、記録をもとに、「今、子どもに必要な経験は何か」を考え計画している。
30	一定期間の記録をまとめ、次の保育の方向性を検討している。

## 5 遊びの充実を目指した取組と変容について

### (1) 新型コロナウイルス感染症による本調査研究への影響

本調査研究は、当初、協力園以外の園にも園訪問を実施し、実情の把握や検証を予定していた。また、協力園においては、園の要請に応じて実行委員による訪問支援や園内研修での講話も計画し、講演会や研修会等も行いながら、調査研究における取組を充実させ、研究を深めていく予定であった。

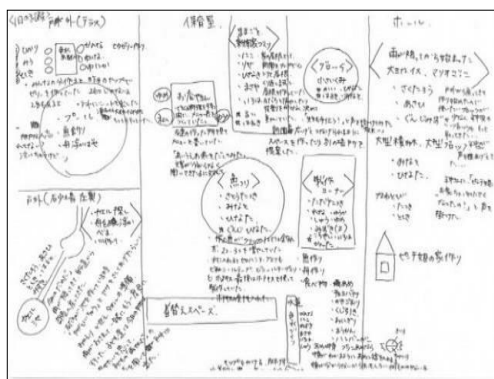
しかし、新型コロナウイルス感染症対策により、これらの計画は大幅に中止・変更せざるを得ない状況となった。

協力園においてはこれまで経験したことがない新型コロナウイルス感染症対策を実施した上での教育活動の展開となり、様々な場面で園の取組を検討しながら本調査研究を進めてきた。

### (2) 重点目標に向かって取り組んだ内容と変容

実行委員会や園内研修では、遊びについて話し合いや検討が進められ、それぞれの実情に応じた工夫が進められた。

教師主導になりがちな遊びの状況に課題を感じていたA園は、記録や指導を見直



すことを重点目標に掲げ、園内研修により記録の改善を進めた。前年度は週日案にクラス全体を捉えて記入していたが、一人一人の遊びの様子や変容の把握が難しいため、今年度、個人記録に様式を変え個々の状況を捉えることを心がけた。更に、幼児同士の関わりが見えるように、1日の遊びの様子に教師の気付きも加えることで、次の遊びの見通しにつながる記録に変化させた。

そして、遊びの様子を1日で区切るのではなく、1週間分を1枚の記録用紙に可視化させることで、遊びのつながりも視野に入れた新たな気付きを次の関わりへの手立てへとつなげていった。

B園は、重点目標の1つに「遊ぶ時間の確保と内外環境の見直し」を設定し、まずは、日課表の改善から取り組んだ。幼児が十分に遊びを楽しむ時間を確保するため、一日の流れを組み立て直し、外遊びが積極的に行われるよう配慮した。砂遊びを中心に、昔遊びも計画的に取り入れた。その結果、季節に応じた遊びと共に、人数が必要となる遊びでは自然と異年齢交流にもつながり、遊びの中には思いやりの姿も増えた。

このことについて、時間や環境構成、関わり等5つの評価指標により取組の成果を確認した。

C園は、遊びの充実と見取りを、記録の可視化とクラスに関わる教師の話し合い（以下「クラス会議」という。）により共有することについて意識的に取り組んだ。継続的なドキュメンテーションへの取組は、遊びの見取りを深め、遊びの広がりにもつながった。更







に、クラス会議により教師の関わり方や教材等についての話し合いは、多様な見取りの共有や幼児への関わり方、環境構成にも生かされていった。更に、作成したドキュメンテーションは、園内に掲示したり行事の待ち時間に活用したりして、園で行う教育活動の意味や遊びを通した学びの具体的な姿として保護

者に説明された。その結果、保護者は、園生活や育ちの姿にも興味関心をもち理解や協力などにもつながっていった。

D園は、幼児が主体的に遊びを楽しむこと、教師がその成長を理解し支えることを目指した。幼児は毎日楽しく遊んでいるが、発達段階や実態に相応した遊びになっているのか、遊びの中にある学びを教師はどのように捉えつなげているのか、指導計画や評価は適切に生かされているのか等について、園内研修により計画的に見直し、教師が考え、話し合う時間を確保することで改善を図ってきた。また、指導案の様式を改善したり保護者に遊びの重要性を理解してもらったりすることにも取り組んだ。お便りだけでなく、園舎内に園児の具体的な遊びの様子写真を掲示したりHPでの発信を工夫したりした。



どの園も、前年度の課題をもとに、園の教職員が一体となって取り組んだ。その結果、協力園の遊びは、他園からも注目されるものとなっていった。

それぞれの園が、自園の課題を意識し、重点目標に向かい工夫を凝らした取組が実施されている。その結果、幼児の遊びの様子も、年度当初に比べ、多くの変容が見られたが、そこに関わる教師の意識も高まってきたことが感じられる。

## 6 学校関係者評価への取組について

今回の調査研究を機に、学校関係者評価委員会を立ち上げた園もある。重点目標に関わる園運営の状況や教育活動の目的について理解した上での学校関係者評価となるよう人選や開催内容等についての検討が進められた。日常の教育活動の様子を伝える方法も検討しながら、園の取組を理解してもらうために様々な工夫が行われた。

### 【学校関係者評価委員会設置において協力園が行ったこと】

- 学校関係者評価委員の選定及び依頼
- 学校関係者評価委員会実施計画の作成
- 教育活動に関する情報提供（保育参観や定期的な資料の提供等）
- 中間評価の実施（園の実状に応じて学校関係者評価委員会の実施）
- 自己評価結果についての学校関係者評価の実施

新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、実際に遊びの様子や教師の関わりの様子を見てもらうことが一番だと保育参観を実施したり、ホームページやお便り等により園の取組を発信したりして、教育活動の目的や状況について理解した上での評価となることを目指した。

また、学校関係者評価委員会で話し合われた意見等については、園内で共有し取組を見直すことにより、重点目標に向けた園の取組は様々な視点で改善が図られていった。また、保護者や地域住民からの理解と参画を得た園づくりを進めることにもつながった。学校関係者評価委員会を新たに立ち上げ、初めて取り組んだ園においても、その効果は十分に感じられるものであり、それにより保護者や地域と園の関係は一層近づくことにもなった。

## 7 今後の課題

### (1) 学校評価の取組に関する課題

本県には、遊びを通した学びに関する課題と、学校評価に関する課題がある。その両方の向上をねらった調査研究であったが、協力園の変化や改善内容から大きな成果を感じている。その一方で、本調査研究の取組や県内各地区での研修から、学校評価の目的や具体的な内容・方法等についての理解を深める必要があることや、重点目標と評価指標の関係性についての課題があることがわかった。

また、協力園からは、重点目標の設定や評価指標の内容なども課題として挙げられた。重点目標を設定し、評価指標も作成して進めてきたが、設定した内容は具体性に欠け、取組が広くなりすぎてしまったこと、評価指標が取組の成果が確認しにくい内容であったこと、内容によっては実際と異なる結果になってしまったことなどの反省点が挙げられた。取り組んだからこそ見えた課題については、解決策を講じながら、県内各園の学校評価をより効果的に実施できるよう生かしていくと共に、学校評価の取組を通して各園の教育活動の改善や向上を図りながら、幼児教育の充実につなげていきたい。

### (2) 遊びを通した学びの充実

本県が目指す「幼児期における遊びを通した学びの充実」は、協力園においても課題の部分であり、重点目標をもとに様々な工夫が行われた。遊びを通した学びの姿は、幼児の発達段階においても、園の環境によっても異なるものである。また、それまでの経験の積み上げも影響する上、教師の捉え方も関わり方も多様である。更に遊びを捉える方法や視点はチェック式でもなければ、決まったものがあるわけでもない。だからこそ、協力園では、ドキュメンテーションによる可視化や園内研修での話し合いにより、共有のための方法を工夫した。このような取組が効果的に行われるには、リードする立場の教員が必要である。

今後、遊びを通した学びの充実を広げていくためには、課題改善への取組をリードしていくことができる副園長や主任、研修リーダー等を計画的に育成していくことが求められる。園の課題を捉え、その改善解決に向け、効果的に取組を進めることができる支援体制や研修等が必要である。

(3) 実効性ある学校評価の実施のために

実効性ある学校評価を組織的、計画的に進め、その取組を継続させていくためには、重点目標と具現化のための取組を年度当初にしっかり設定しておくことが大切である。また、取組の成果の確認においては、評価指標の設定も大きく関わってくるので今後は、重点目標に対する取組の成果を具体的に確認するための取組指標や成果指標の設定により、自己評価を行う必要がある。これらを踏まえた取組状況の計画的な確認や、適切な見直し等、実効性ある学校評価の実施を県内全園に普及させていくことを目指していきたい。

今年度は、学校評価改革の第一歩目であり、様々な課題発見につながった。園の課題と学校評価をつなげ、学校評価の取組自体も向上させていくためには、まだまだ改善すべき部分はあるが、実効性ある学校評価の実施を目指して、今年度の取組を進化させていきたい。

## V 調査研究から見た学校評価に取り組む際の留意点

調査研究においては、様々な疑問や悩み、課題が生じた。その一つ一つが、学校評価を進める際の留意点であり、ポイントとなる部分でもあった。今年度の取組をもとに、以下に学校評価における内容を確認し、取組の流れとしてスケジュール例をまとめる。

**① 重点目標を具体的に設定する。**

重点目標とは⇒今年度、特に力を入れておいて取り組みたいこと

**② 重点目標にせまるための手立て（取組）を検討する。**

手立て（取組）とは

⇒重点目標のために具体的に取り組むこと。目標を更に焦点化する。

**③ 重点目標ごとに、評価項目・評価指標を作成する。**

◇取組指標⇒どの程度取り組んだのかを確認するための基準

◇成果指標⇒取組みによりどんな成果があったのかを確認するための基準

**④ 教育活動の実施と振り返りをもとに改善を図る。**

**⑤ 自己評価を実施する。**

自己評価⇒重点目標に対する「園としての取組の成果」を確認するもの。

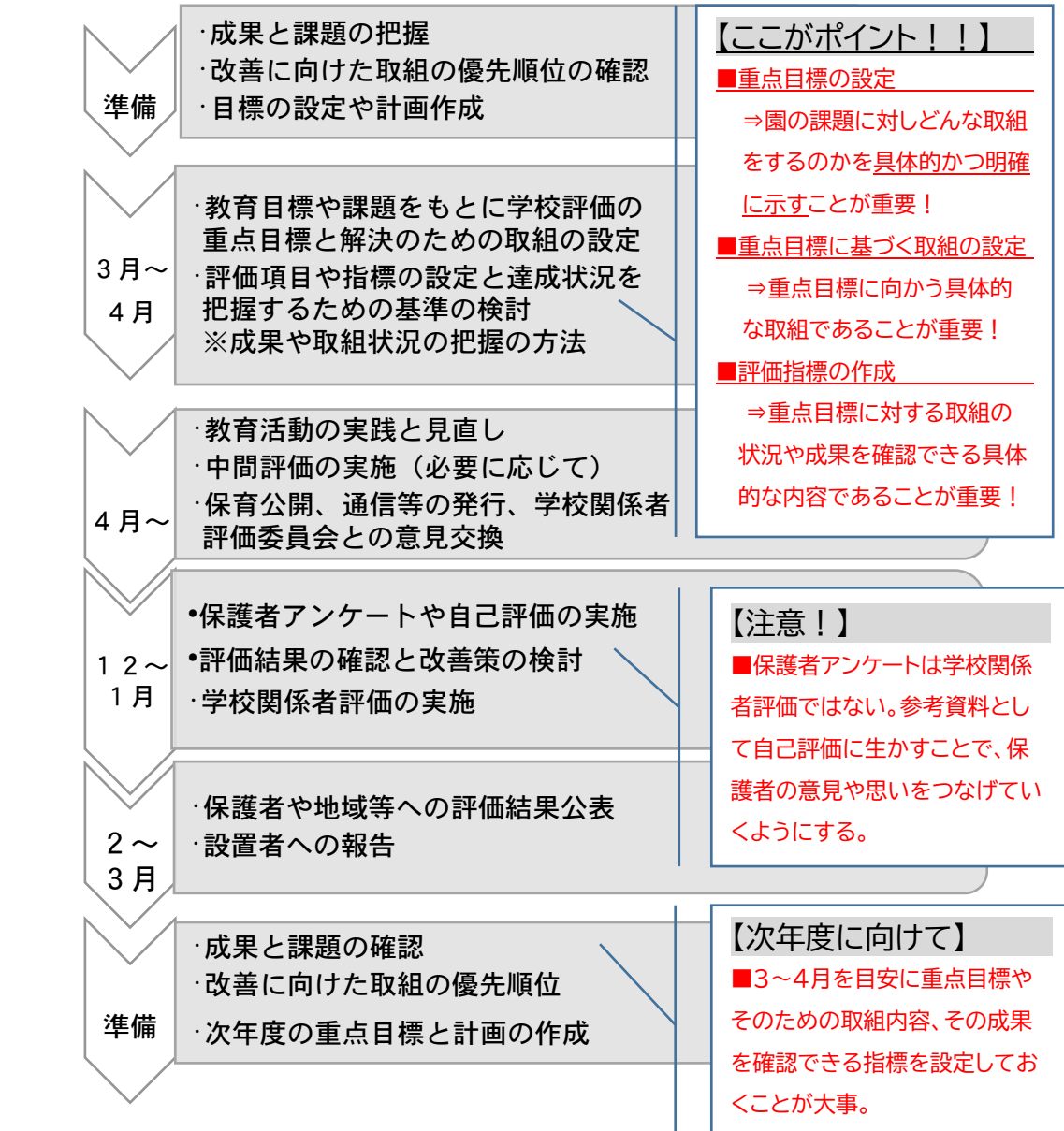
(個人の取組の振り返りではない。)

保護者アンケート⇒自己評価の際の参考資料として活用する。

(学校関係者評価ではない。)



## 【学校評価スケジュール例】



学校評価を進める際、まずは、成果や課題を把握すること、そこから改善の優先順位をもとに長期と短期のスパンで取り組む内容を確認し、園の実情に応じて、組織的・計画的に進めることが効果的な学校評価の実施につながる。前年度の反省を今年度の学校評価の取組に生かしていくためには、年度当初における準備が有効である。

なお、今回の調査研究は、文部科学省との事業締結後に開始していること、また、新型コロナウイルス感染防止対策のための臨時休園措置期間等により、調査研究に関する確認ができず、実行委員会を6月末に立ち上げてからの取組となった。

加えて、協力園においては、新型コロナウイルス感染防止対策等などにより、予定した内容その都度見直すことになり、変更しながら進めてきた。また、1月末に調査研究に関するまとめの資料を作成する都合上、全体に進行が予定されていたものとは異なる状況となっている。

## VI おわりに

---

学校評価は、課題に対する今年度の重点目標を設定し、園の取組は有効だったのかを確認し、次の保育に生かしていくものである。その取組状況や成果を確認するものが評価指標となる。つまり、重点目標の設定と取組内容の検討、その成果を確認するための評価指標が鍵となる。重点目標が核となるので、課題を焦点化し、より具体的に設定することで具体的な取組や改善・解決につながっていく。

前年度までの教育を振り返るということは、自園の教育や取組に慣れれば慣れるほど、見えにくくなったり捉えにくくなったりするものでもある。遊びを捉えるということも同様である。だからこそ、協力園はそれを可視化し確認する方法を工夫した。

しかし、取り組めば取り組むほど、次の課題や悩みも生じていた。「今年度、この重点目標でよかったのだろうか」、「取組を修正したいが負担加重をさけ今後も継続していけるものにするためにはどうすればいいのか」、「評価指標により評価したが、確認したい内容が確認できたと思えない。評価指標の内容についてはもっと工夫できそうだ。」、「学校関係者評価の実施による成果を実感している。でももっと効果的な方法があるのではないか。」、「1年目の今年度の取組をどのように次年度につなげていけばいいのだろうか。」成果を感じたからこそその前向きな課題ではないだろうか。このような姿勢や取組により、園の教育活動そのものが変容し、質の向上につながっていく。そして、新たな重点目標が生まれ、それに対する取組を工夫し、設定した評価指標により確認しながら改善していくこと、それを継続していくことにより、実効性ある学校評価となっていく。

本調査研究のテーマは、「園運営や幼児教育の質的改善を目指した園における学校評価の在り方」である。限られた幼児期の遊びを支えるために、まずは園の実状や課題を具体的に捉えること、重点目標を具体的に設定すること、そして重点目標に対する具体的な取組を通して改善を図っていくこと、その取組状況や成果について評価指標により具体的に確認し、次の学校評価につなげていくことが大切であること、それこそが確実な質の向上につながっていくことがわかった。

本県における学校評価の理解や取組は、まだまだ課題が多いが、工夫し改善できる部分も多い。学校評価の目的や効果的な方法を探りながら、様々な山積課題を少しずつ解決していくために、今後も学校評価への取組を推進していきたい。

本調査研究を進めるにあたり、実行委員会代表を引き受けてくださった福島大学の白石昌子先生には、実行委員会のみでなく、調査研究を進めていく上でも様々な場面で御指導、御助言をいただいたことに心より感謝申し上げます。また、実行委員会では様々な事例をもとに御指導くださった福島大学の原野明子先生、これまでの保育実践における取組をもとに具体的なアドバイスをくださった福島県国公立幼稚園・こども園協議会代表の津田和枝先生に厚く御礼申し上げます。

令和2年度福島県幼稚園における学校評価に関する調査研究実行委員

(所属は令和3年3月現在)

		氏名	所属・職名
1	代表	白石 昌子	福島大学人間発達文化学類教授
2	代表補佐	原野 明子	福島大学人間発達文化学類教授
3	委員	津田 和枝	伊達市立堰本幼稚園長 (福島県国公立幼稚園・こども園協議会)
4	委員	吉田 登子	田村市立滝根幼稚園長(協力園)
5	委員	藤田 智子	棚倉町立高野幼稚園長(協力園)
6	委員	佐藤 和恵	喜多方市立第一こども園長(協力園)
7	委員	石川 幸男	飯舘村立までの里のこども園長(協力園)
8	委員	宗像 克博	田村市教育委員会指導主事
9	委員	荒川 文雄	棚倉町教育委員会指導主事
10	委員	佐藤 毅	喜多方市教育委員会指導主事
11	委員	佐藤 育男	飯舘村教育委員会指導主事
12	委員	須田 智美	県中教育事務所指導主事
13	委員	舟木 裕子	県南教育事務所指導主事
14	委員	小向 恵子	会津教育事務所指導主事
15	委員	國分 伸志	相双教育事務所指導主事

【事務局】 福島県教育庁義務教育課

本調査研究における参考資料・文献等

幼稚園教育要領(文科省)

幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府)

幼稚園における学校評価ガイドライン(平成23年改訂)

私立幼稚園のための学校評価ハンドブック(平成24年度)

令和2年度都道府県協議会協議主題について(文科省)

幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開(文科省)

幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解に基づいた評価(文科省)

幼稚園教育指導資料第5集 指導と評価に生かす記録(文科省)

「平成29年度新幼稚園教育要領ポイント整理 幼稚園」(東洋館出版社)

「遊びを中心とした保育」(萌文書林)

「目指せ、保育記録の達人！」(フレーベル館)

「新・保育環境評価スケール」(法律文化社)

「3・4・5歳児のごっこ遊び」(ひかりのくに)